

# フィリピン文学における日本兵の描写

— 1920年代から80年代までの作品を中心に —

高野 邦夫

## Portrayal of Japanese Soldiers in Philippine Literature from 1920's to 80's

Kunio TAKANO

### I フィリピン文学とは

残念なことに、今日まで本国ではフィリピンの文学はあまり紹介されておらず、それゆえほとんどの人にとってフィリピン文学のイメージすら湧かない。フィリピン文学の定義自体が非常に曖昧なまま放置されている。ではフィリピン文学とは「フィリピン語」で「書かれた」作品群を指すかというところでもない。そもそもフィリピン語という言葉の存在すらあやふやである。1987年に発布された憲法によると、フィリピン語(Wikang Filipino)とは、首都マニラとその近辺の州で話されているタガログ語を基盤としながらも、フィリピン各地に存在する様々な言語の特長を取り入れた全国に通じる国語である、とされている。しかし実際のところ、タガログ語との大きな差異は見られない。ではフィリピン文学とはタガログ語文学を意味するのか、ここが最も誤解を招きやすい点である。現存する作品数で言うとタガログ語で創作されたものが最多であるが、タガログ語文学＝フィリピン文学とは言えない。フィリピン文化を形容する際に頻繁に使われる「ハロハロ(ごちゃ混ぜ)」、「サリサリ(多様)」であるのがフィリピン文学の特徴なのである。フィリピンでは100以上の言語が話されており、主要言語だけでもタガログ語の他にセブアノ語、イロカノ語、ヒリガイノン語、ワライ語、ビコール語、パンパンガ語、パンガシナン語がある。マニラに本社のあるリワイワイ社では週刊で大衆向け文芸雑誌を発行しているが、タガログ語で書かれたリワイワイ(Liwayway)の他、イロカノ語で書かれたバンナワグ(Bannawag)、セブアノ語で書かれたビスヤ(Bisaya)、そしてヒリガイノン語で書かれたヒリガイノン(Hiligaynon)がある。

タガログ語以外でも活発に創作活動が行われていることが窺える。多くの移民を輩出しているイロカノ人は世界各地に文芸サークルを作り、フィリピン国外でも積極的に執筆活動を行っている。またフィリピンは3世紀以上にわたりスペイン、続いてアメリカの植民地となったため、旧宗主国の言語であるスペイン語や英語で書かれた作品も数多くある。

フィリピン文学のもう一つの特徴に、口承文学の存在が挙げられる。「異教徒の文化は悪魔の産物である」と信じていたスペイン人宣教師たちにより、キリスト教の布教が進んだ地域では口承文学のほとんどは失われてしまったが、スペイン植民統治に抵抗した地域や統治の及ばなかった辺境の地では生き残ることができた。ミンダナオ島マノボ族のトゥワアン、同じくミンダナオ島マラナオ族のバントゥガン、パナイ島のヒニラウッドなどがそうである。

以上に述べたように、様々な言語で書かれもしくは口伝えによって今日まで受け継がれたのがフィリピン文学なのである。

## II 戦前の日本人の描写

日本兵が作品に登場するようになるのはいうまでもなく戦後であるが、それ以前にも日本人は登場していた。

例えばリワイワイ誌 1927 年 12 月 9 日号に掲載されたニエベ・バエンス＝イ＝シビリャの『日本人女性』という短編では、乳母として雇われたサウィヤという名の日本人女性が主人公である。当初フィリピン人ではないのだから子供たちの養育にふさわしくないと断られるのであるが、子供たちがすぐになついたため、子供たちにキスをしない、添い寝をしないという2つの条件で雇われることとなる。2年後に米国へ留学していた子供たちの父親が戻ってくると、サウィヤが本当はフィリピン人で子供たちの真の母親であることが判明する。不貞の罪で服役した後、自らの子供に近づくために日本人女性に扮したというのである<sup>(1)</sup>。

同じくリワイワイ誌 1940 年 8 月 30 日号に掲載されたヘスス・エスゲラの『新“蝶々夫人”』では、「桜」というナイトクラブに勤めるイカヒデという名の日本人ホステスが主人公である。夕刊記者のラマヤンが馴染みの客となりイカヒデに求愛するが、イカヒデはすぐに返事をせず翌日に戻ってくるよう伝える。あくる日ラマヤンが戻ってくると、彼宛ての手紙が残されている。手紙には、ラマヤンの申し出をありがたく思うが、何しろ流れの身であるのでラマヤンにふさわしい女ではない、と書き残されていたのであった<sup>(2)</sup>。

作品における登場人物の描写というのは、作者の創造の産物であることには違いない

のであるが、その源泉である作者自身の思考は様々な影響を受けている。日本人の描写についても然りで、作者の属する文化的背景、そしてその作品が書かれた時代のイデオロギーの影響を受けている。以上紹介した2つの作品では魅力的で奥ゆかしい日本人女性が描かれているが、その根拠は一体どこに見つけられるのだろうか。スペイン、アメリカと長期に渡って欧米列強の支配下に置かれたフィリピンに、19世紀後半にヨーロッパに広まったジャポニズムの影響が流入し、日本人女性イコール芸者のイメージが定着したのであるだろうか。しかしそれ以上に大きな影響を与えたと考えられるのが、「からゆきさん」を中心とした現地滞在の日本人女性であった。植民地支配関連でやって来た西欧人を主に相手にするために東南アジア各地で売春に従事していたからゆきさんは、フィリピンにも押し寄せていた。首都マニラのサンパロク地区にあった赤線地帯では、日本人売春婦の存在が報告されている<sup>(3)</sup>。また在マニラ日本領事館の統計には、乳母として働く日本人女性も記載されている。乳母のサウィヤやホステスのイカヒデは、作者が当時周囲で身近に見聞きしていたことを基にして創り上げられた人物であると考えるのが妥当であろう。

もちろん日本人男性も作品に登場している。ブロークンなスペイン語を話す床屋経営者、カキ氷売りやボン菓子売りなどである。これらも実際に当時フィリピンに出稼ぎに来ていた日本人男性が就いていた職業であった<sup>(4)</sup>。

### Ⅲ 日本兵の描写

1941年12月8日、日本軍は真珠湾を攻撃した数時間後にフィリピンにある米軍基地も攻撃している。翌年の1月には首都マニラを制圧し、植民地統治を開始した。日本統治下では文筆活動自体は禁止されなかったが、様々な制約が課された。まず敵性言語である英語やスペイン語の使用が禁止され、代わりにタガログ語での創作が奨励された。3世紀以上にわたる欧米列強の支配下に置かれたフィリピンから西欧の影響を打ち消し、大東亜共栄圏の一員としてのアジア人の意識を復活させるという名目の下、勤勉を訴え愛国精神を鼓舞しフィリピン古来の文化を尊重するように地方色を豊かに押し出した作品が生み出された。当時主流だった英語作家が生活のためやむを得ずタガログ語で執筆活動を行ったため、タガログ語文学に西欧文学の洗練された技巧が取り込まれ、タガログ語文学は一つの黄金期を迎えることとなる。しかし厳しい検閲の下、日本軍を中傷するような記述は一切許されることはなかった。それゆえ、本格的に日本兵が作品群に登場するのは戦後である。

フィリピン史を専門とする歴史家の寺見元恵は1946年に出版されたリワイワイ誌全号を調査しているが、作品に登場する日本人はすべて日本兵であったと述べている。日

本兵は「常に軍刀を腰にかけ」、「無精ひげ」で「ザッザッと歩き」、「L と R を区別して発音できず」、「釣り目」で「がに股」であった。「ケダモノ」とも形容されている<sup>(5)</sup>。このような最中、ステバン・ハベリャーナの『暁を見ずに』が出版される。

1947 年にアメリカのボストンで出版されたこの作品は 359 ページにも及ぶ長編小説で、英語で書かれている。「昼」と「夜」の 2 部に分かれており、前半ではフィリピン・パナイ島のある村落に暮らす農民の牧歌的な生活が地方色豊かに生き活きと描かれている。日本兵の来襲は、後半の夜の部に主人公カルディンの住む村落を襲う不運の一つとして描かれている。作者によれば、これはバタアンその他の戦線におけるフィリピン兵士の物語ではなく、抗日ゲリラに身を投じた一人の農夫の復讐と死の物語でもある<sup>(6)</sup>。日本兵の残酷さを描くことがこの小説の主題ではないにしろ、その描写は大変生々しい。

ある夜、日本兵は抗日ゲリラのアジトを探しに村にやって来る。村落のはずれ、町に通ずる道の近くに住むバスチャンおじさん一家が最初の犠牲者となる。息子のポンシンはゲリラと疑われ拷問に遭う。銃の台尻で頭を殴られたり腹に強烈な拳骨をぶちかまされたりして意識を失ってしまう。猛烈にひっぱたいても正気に戻らないことがわかったと、日本兵はポンシンを丸裸にして、マンゴの樹の下にあった燃えさしの炭を少年の陰部に置く。この世のものとは思えない苦悶の叫び声をあげて正気に戻ったポンシンがなおもゲリラの居所を白状しないことがわかったと、家屋の下で見つけた重い杵を少年のほっそりした腰にくだけよとばかりぶちこむ。

彼等は軍靴で潰れた体を引っくり返し、その顔を踏みつけてまだ生きているかを調べた。彼等はもっと燃えている炭をその上に乗っけたので、ついには人肉の焼ける吐き気を催すようなツンと来る臭いがあたりに立ちこめた。たがポンシンはすでに死んでいた<sup>(7)</sup>。

また娘のアリーシアを見つけ目をギラギラと光らせた日本兵は、「処女の（恐怖で）硬くなった白いからだを見るや肉欲に盲目となり、彼女をゆっくりと床に押し倒しかけた…何人かが彼女の手足を押さえつけている間に、残る者がかわるがわる彼女の肉体の上でその欲望を満たした」<sup>(8)</sup>。

このような日本兵の残虐性を描くに至った理由は、インタビューにおけるハベリャーナの受け答えから想像できよう。

私がこの小説を書くに至ったのは偶然ではありません。当初から時代の叫びを書き留める必要があることを私はわかっていました。闘うことを選び死に至った人々の声を伝える者がどこにいたでしょうか。勝つ見込みのない、ときには心を打ち砕く

ような人々の闘いを記録する者がどこにいたでしょうか。だから私は自分に言い聞かせました。武器を取って戦えないのであれば、闇の中に倒れようとしている人々の涙、ため息そして苦悩を記録しよう…また農民について書くことを選んだのも偶然ではありません。ゲリラを匿い食事を与え移動を手伝い、そしてそのために命を落とすことも頻繁にあったのは、まぎれもなく彼等農民たちだったからです<sup>(9)</sup>。

作者にとって、この小説はフィリピン人の戦時下における経験を次世代に伝えるための記録なのである。闇に倒れた声なき人々を代弁し、彼らの不屈の抵抗を民族の誇りとして未来のフィリピン人に伝えようとしたのである。

作者ハベリャーナは戦前、首都マニラにある法科大学院で弁護士になるための勉強をしていたが、太平洋戦争が勃発すると故郷のパナイ島に戻り地元の抗日ゲリラに参加する。彼は諜報部門の記録係であった<sup>(10)</sup>。任務上、地元農民と生活を共にすることも多かったため、彼らから見聞きした話に自分自身の体験を重ね合わせ日本人像を造ったと考えられる。

粗暴な日本兵の描写というのは戦後しばらく続くが、1960年代に入ると様子が変わってくる。例えばリワイワイ誌1961年8月7日号に掲載されたレオニラ・ゴンザレスの『スズコ オガワ』からその変化が読み取れる。この短編は日本占領期にジャーナリストの夫を失った一人の妻が、今度は夫の命を奪った日本という国から一人息子が嫁を迎え、実家に連れてきた際の感情の葛藤を描いている。しかし嫁のスズコの父親が日本軍の一員としてフィリピンに送られ戦死し、残された母子がこれまでつらい思いをしてきたことを聞かされ、心の葛藤がほぐれていくのを感じる。

…あの海の向こうにも待っていた妻たちがいたのだ。孤児になった子達がいたのだ…。抑圧者たちの側にさえも、抑圧された者たちがいたのか。私は思った。私達の方がましではないだろうか。そりゃ私達の方は侵略され孤児が生み出された。しかし私達が受け継いできたのは、勇敢な清い名ではないか。一方彼らの方はどうだろうか。黒い背徳の烙印を押され、世の非難を受けている<sup>(11)</sup>。

日本人を侵略者というだけではなく、日本人の側に立って彼らもまた戦争の犠牲者であると述べているのは、大きな変化である。1960年代は、長い話し合いの末によりやく締結された日比賠償協定によるフィリピンへの支援が本格化した時期である。フィリピン人の戦争の傷跡にも変化が生じたのであろう。

この変化はアマド・ヘルナンデスによるタガログ語長編小説『猛禽類』にも見られる。労働組合活動に長年関わっていたヘルナンデスらしく、この小説も大土地所有者と小作

人、資本家と労働者といった二項対立を軸に話が進む。主人公のマンドは革新的な思想の持ち主で、探し出した財宝を資金源にしてフィリピン社会に変革をもたらしたいと考えている。財宝を手に入れたあと、マンドは以前働いていたドン・モンテロ所有の大農園に戻る。このドン・モンテロは、自分の利権を守るために時の権力者と手を組むご都合主義者である。コレヒドール島が陥落し日本軍が進駐してくれば、米軍とは縁を切り、直ちに日本軍と手を組むのである。そこへ登場するのがモト大佐だ。

モト大佐は集団の一人ではなく個人として描かれているが、その性格描写は浅いものである。「階級に相応しい清潔でピシッとした軍服に身を包み」、「酒と女が好き」である。「気立てが良く」て「普通の日本兵よりも背が高く、良家の子息であることは明らか」である。「ロマンチック」で「夜になると匂いの良い花のような女性たちを追い回す」<sup>(12)</sup>。モト大佐と恋仲になったドン・モンテロの娘ドーリーは、アメリカ人との混血である友人のリリベスに嫉妬し、その件についてモト大佐に問いただす。モト大佐が答えるには、「ドーリー、おまえ自身とリリベスを比べてはいけないよ。お前は私にとって特別な存在だ。お前はいつも私の胸の中にいる。戦争が終わったら、いっしょになりたいと思う」<sup>(13)</sup>。しかし東京の軍司令部からの命令でモト大佐はマニラへ配置転換となる。そして数日後、大東亜通りにあるアパートで切腹した大佐の姿が発見される。大佐がなぜ切腹をしたのか詳しい説明は見られない。ロマンチックで求愛上手、酒と女好きの性格というのは、フィリピン人男性一般を描く際によく使われる表現である。外見は日本兵だが中身はフィリピン人と変わらないというのがこのモト大佐の描写である。ここには『暁を見ずに』のように日本兵の残虐な行為を記録しようなどという目的は見られない。この長編小説の大きなテーマは、題名にもなっている猛禽類たちに立ち向かう主人公マンドの物語であるからだ。作者によると猛禽類とは、

この世には食うために生まれてきた者、食われるために生まれてきた者がいる。前者はその力と食欲さで後者を痛めつけることにより喜びを得るのだ。前者は山々に生息しているだけでなく、平地や畑地、沼や海、街や高層ビルの中、政府や各界の高い地位に属する人々の中にも存在する。鋭い嘴や鉤爪を使って犠牲になった後者の生き血をすすめるのだ<sup>(14)</sup>。

この小説の中では、ドン・モンテロもモト大佐も猛禽類の一種として描かれている。主人公が目指すのは、フィリピン全国民が胸を張って生きてゆけるような新しい公平な社会である。これは作者ヘルナンデスが実際の組合活動を通じて目指したものである。その行く手を阻むのが彼ら猛禽類だというのだ。

80年代に入ると、戦後続いた反日感情による時代の束縛や作者の個人的体験を抜け

出し、フィリピン史の一登場人物として日本兵は描かれるようになる。80年代にイロカノ語で書かれたホセ・ブラガドの『パムリナウエン』にその変化を垣間見ることが出来る。作者は1936年に南イロコス州で生まれ、幼少の頃に日本占領期を経験しているが、日本兵に対し個人的葛藤はないという。ブラガドがこの時代設定を取って選んだのは長年に渡る創作活動の中で挑戦してみたかったからだと述べている<sup>(15)</sup>。この証言は信頼に値するものであろう。またこの『パムリナウエン』は、文体を各連4行で韻を踏ませるという叙事詩風になっている。新たな時代設定と文体への挑戦というのが、ブラガドにこの作品を書かせることになった大きな理由である。

パムリナウエンとはもともとイロカノ語で「硬い石」の意味を表すが、この作品の中では抗日ゲリラの隊長リカルドのコードネームである。この主人公と日本軍のフリカワ大尉との対立を軸に話が展開する。

ハワイの真珠湾攻撃後、当時アメリカの植民地であったフィリピンにも日本軍の攻撃の手が及ぶ。主人公リカルドの住んでいるルソン島北部、南イロコス州にあるバロガの村まで日本軍の航空隊は爆撃を行い、村人の平和な生活は一変する。地元の人々にとっては、飛行機の翼に描かれていた日の丸は「血の象徴」であった<sup>(16)</sup>。やがて日本軍が駐留するようになるが、地元民の抵抗に遭う。仲間の日本兵が殺害され、関与を疑われた村の男どもは連行される。その中にリカルドの父であるアंकアン爺がおり、ゲリラのメンバーとその拠点を教えるよう促されるがアंकアン爺は決して口を割らず、拷問の末に銃剣で胸を刺され命を失う。これを契機として父の仇を討つためにリカルドは自らゲリラを組織し、日本軍に抵抗していく。

リカルドの住む地域に責任者として配置されたのがフリカワ大尉である。言うまでもなく敵役であるが、「もう一方の主人公」と作者ブラガドが述べているように、リカルドと対峙するかたちで話の進行の鍵を握る人物設定にされている。他の文学作品同様、この作品中でも日本兵は残忍な存在として描かれており、フリカワ大尉もその例外ではない。大尉が部下に命令を下す際には

見かけた住民はすべて殺してしまえ  
一人残らずだ  
女は皆暴行してしまえ  
家々はすべて焼き払い、灰にしてしまえ<sup>(17)</sup>

この作品で注目すべきなのは、一人の日本兵の内面や感情までもが豊かに表現されている点である。リカルド率いるゲリラに駐屯地を急襲され、責任の追及を恐れたフリカワ大尉は夜なかなか寝付かれず、うたた寝しては目を覚ます。窓から朝日を見上げ、日

本に置いてきた妻を思い出す。

出征の日を迎えたある昼のこと

思い出すのは涙ながらの妻の接吻<sup>(18)</sup>

日本兵を顔の見える個人として内面まで描いた作品は珍しい。フリカワ大尉は自らの信念と目標に基づいて行動する一個人として描かれている。戦後すぐに書かれた作品群に比べ、作者の一步引き下がった客観的視点が窺える。

この作品の書かれた 80 年代という時代背景についても触れてみたい。戦後 30 年以上が経ち、世界第 2 位の経済的繁栄を享受していた日本に、この頃から盛んにフィリピン人女性がエンタテイナーとして出稼ぎに来るようになる。彼女たちは母国に比べて高い給与体系、街の清潔さ、日本製のハイテクな工業製品や生活水準の高さなどのポジティブなイメージを国に持ち帰った。それ以前から日本製の車や電化製品はフィリピンの巷に出回り、高度に発展した国というイメージはあっただろうが、実際に日本に滞在した経験のある同国人の口から聞いた話はより説得力があったと思われる。彼女たちが故郷に御殿を建て始めると、「日本はお金持ちの国」というイメージが定着し、日本に対してヒトというよりはモノとしてのイメージが抱かれるようになる。日本占領期は苦しかった一つの時代としてお年寄りの記憶に留まるに過ぎず、日本が占領した他の東アジアの国々のように戦後生まれの子孫たちにまでその憎しみの感情が引き継がれることはほとんど見られない<sup>(19)</sup>。出稼ぎに来た同国人の持ち帰った新しくしかもポジティブなイメージがより浸透していったと考えてよいだろう。

#### IV 物語設定の観点から

日本兵のネガティブな側面が主に描かれるに到った理由を物語の設定に求めてみたい。特に戦後すぐに発表された日本兵の登場する作品群では、登場人物を 4 つのグループに分類できる<sup>(20)</sup>。1 つ目は愛国心に溢れ、フィリピン人のナショナリズムの象徴である主人公、2 つ目は祖国の敵である日本軍、3 つ目が主人公の味方やフィリピン人ゲリラを支援したアメリカ軍、4 つ目が祖国の裏切り者と見なされたご都合主義者や対日協力者である。1 つ目のグループは 2 つ目のグループと敵対関係にあり、また 4 つ目のグループと対立関係にある。2 つ目のグループは 3 つ目のグループと対立関係にあるが、4 つ目のグループとは協力関係にある。3 つ目のグループは 4 つ目のグループと敵対関係にあるが、1 つ目のグループとは同盟関係にある。これらの関係の位置づけの源となるのが、祖国フィリピンへの愛国心である。たいていの場合、主人公を愛国心のあるフィリ



ピン人ゲリラに据えるため、敵役は日本兵や対日協力者などとなる。その敵対関係のコントラストが際立てば際立つほど読者の愛国心に訴えるわけであるから、日本兵の無慈悲な側面が強調される傾向にあるのは自然の成り行きである。実際に日本と同じくフィリピンを植民地にしたアメリカではあるが、太平洋戦争で敵となった日本軍を倒すためにフィリピン人ゲリラを援助し、その結果作品中では主人公を助ける味方の地位を得、さらに肯定的なイメージを強くしていくことになる<sup>(21)</sup>。

## おわりに

今日に到るまで、日本兵に対するイメージは残虐で悪名が高いものであることには変わらない。しかしながら 60 年代を一つの境として、文学作品における取り扱い方に変化が見られるようになった。ハベリャーナのように民族の記憶として次世代に伝えたいという趣旨から、ブラガドが示したように個人的感情や時代の束縛を乗り越え、フィリピン史の一部として語られるようになった。フィリピン国内には性能の優れた日本製の車や電化製品が出回り、日本への出稼ぎから戻ってきた同国人は日本の肯定的印象を周囲の人々に広めた。現在では日本製のアニメも吹き替えて放映され、子供たちの間で大変な人気を得ている。どちらかというモノとしての日本という新たなイメージが、若い世代を中心に根付きつつある。今後フィリピン文学において、日本兵以外にも日本の何が描写されているか、注目する必要があるだろう。

## 《注》

- (1) Nieve Baens y Sivilla, "Ang Haponesa", *Liwayway*, ika-9 ng Disyembre, 1927.
- (2) Jesus S. Esguerra, "Ang Bagong 'Madame Butterfly'", *Ibid.*, ika-30 ng Agosto, 1940.
- (3) Motoe Terami-Wada, "Karayuki-san of Manila: 1890-1920," *Philippine Studies* 34 (1986), pp. 287-316.
- (4) 早瀬晋三『「ベンゲット移民」の虚像と実像：近代日本・東南アジア関係史の一考察』（同文館出版 1989）pp. 26-27.
- (5) Motoe Terami-Wada, "Postwar Japanese Images in Liwayway Short Stories and Serialized Novels, 1946-1988," Gina Barte (ed.), *Panahon ng Hapon: Sining sa Digmaan, Digmaan sa Sining* (Manila: Sentrong Pangkultura ng Pilipinas, 1992), pp. 83-91.
- (6) 作者の覚え書より。Stevan Javellana, *Without Seeing the Dawn* (Boston: Little, Brown and Co., 1947).
- (7) *Ibid.*, p. 230. 邦訳が出ているため、ここから引用した。阪谷芳直訳『暁を見ずに』（勁草書房 1976）p. 199.
- (8) *Ibid.*, p. 198.
- (9) "Notes on Javellana," *Philippine Free Press*. May 31, 1947.
- (10) *Ibid.*

- (11) 邦訳より引用。寺見元恵訳 レオニラ・ゴンザレス「スズコ オガワ」『フィリピン短編小説珠玉選 (1)』(勁草書房 1978) p.65 原文は Leonila Gonzales, "Suzuko Ogawa", *Liwayway*, ika-7 ng Agosto, 1961.
- (12) Amado V. Hernandez, *Mga Ibong Mandaragit* (Quezon City : International Graphic Service, 1969), pp. 47-50.
- (13) *Ibid.*, p. 51.
- (14) *Ibid.*, pp. 179-180.
- (15) 2003 年 1 月 19 日に行った作者とのインタビューから。ブラガドは非常に精力的に執筆活動を行っており、週刊のバンナワグに長年連載を持っていたため書くのが速い。2003 年の 2 月の時点で 19 の小説, 65 の短編, 60 の詩, そして 7 つの小説風漫画を書き上げている。また彼は 1974 年ルバング島で発見された残留日本兵の小野田少尉をモチーフに、『フリカワの島』を書いている。
- (16) Jose A. Bragado, *Pamulinawen* (Makati: GUMIL Metro Manila, 1995), p. 6.
- (17) *Ibid.*, p. 20.
- (18) *Ibid.*, p. 22.
- (19) 例えば Evelyn L. Estrella, "Kandila sa Harap ng Bahay", *Liwayway*, ika-31 ng Oktubre, 1988 を見よ。
- (20) semiotic square の概念を参考にした。Stefan Titscher, *Methods of Texts and Discourse Analysis* (London: Sage Publication, 2000), pp. 128-129.
- (21) アメリカに対する肯定的な見方は、屈折した形で他の箇所にも見られる。例えば Edilberto Tiempo の小説 *More than Conquerors* に登場するナカムラ大尉は、日本軍による拷問にひたすら堪える主人公に同情する「良き」人物として描かれているが、イエール大学で政治学を修めたという設定になっている。